

第2章 患者さんへの一言 これからの時間は、「家族へのプレゼント」にしませんか

「ケアの質を高める 在宅でのこの一言！」

編著：日本プライマリ・ケア学会 掲載
だいとう循環器クリニック 院長

がんが進行し、在宅での療養（在宅ホスピスケア）の道を選ぶ方も少しずつではありますが増えてきました。病院での手術や化学療法にほとんど疲れきってから在宅ですから、久しぶりに帰宅できても、これからの生活に希望を見出しにくく、心は深い絶望にうちひしがれていることしばしば経験致します。

少しでもおいしいと思われる食事を準備し、吐き気や呼吸苦、そして排便時の難儀に対して、必死になって献身的に支えようとする家族がいるにもかかわらず、療養者自身は、「なぜ日本には安楽死が認められていないんだ」「少しでも早く姿を消してしまいたいのだ」と自分自身の中に閉じこもってしまうこともあります。

進行がんの場合でも、生活意欲の旺盛な方も多くおられます。しかしながら一方では、自分の置かれた状況からその不自由さや、自分だけが不治の病にとりつかれている不条理、家族への負担を過度に気にするなどの点から、少しでも早くこの世から姿を消したいと希望されることしばしばあります。

安楽死の容認・法制化はオランダ、ベルギーでは数年が経過しましたが、日本では、まだ将来的な検討課題です。こんな場合に私は、現在は、療養者自身にこのように語りかけるようにしています。「もう自分でこの世でやるのが全くなかったとしたら、これからの残された時間は、『ご家族へのプレゼント』とすればいかがですか」

ご家族はまだまだあなたにそばにいてほしいと、心から願っているじゃないですか。

